資料２

いじめ防止対策調査会第１回会議　議論のまとめ

【ネットいじめについて】

○　認知件数増加の背景

ネットいじめが増加している背景として、コロナ禍により対面でのコミュニケーションをとる機会が減ったことが考えられる。子どもにとって、目の前にいない相手に対して、自分の言葉や文章によるメッセージが相手を傷つけてしまうという実感が伴わないことが考えられる。

また、オンラインゲームの普及による影響も考えられる。子どもたちは、顔が見えないバーチャル空間内での仲間を作り、このバーチャル空間内のゲームの中で乱暴な言葉を使ったり、チームから排除されたりすることがある。バーチャルでの関係が、ＳＮＳや、現実の世界における子どもたち同士のコミュニケーションにも影響を及ぼしていることも増加の一因と考えられる。

さらに、子どもたちへのスマートフォンの普及、ＳＮＳ等の利用者の低年齢化も増加の一因と考えられる。

○　相手の立場に立って具体的に指導すること

ネットいじめの特徴の一つとして、ＬＩＮＥをブロックした側に悪気はなくても、ブロックされた側は傷つく、いじめられたと感じるなど、意図しないいじめになることがある。

そのため、いじめとなり得る具体例を挙げて子どもたちに指導することが有効である。

例えば、メッセージを相手に送る前に、「メッセージを受け取った相手がどう受け止めるかを、想像してから送るようにすること」「一つのメッセージがいじめに発展する可能性があるという意識を持つこと」。

また、「ＬＩＮＥをブロックしたことで相手は〇〇と思うよね。」というところをきちんと伝え指導することが重要である。

発達段階に応じて、携帯電話やＳＮＳ等の企業から講師を派遣してもらい、いじめの具体的な例を用いて子どもたちが学ぶことは、効果的な取組である。

○　ネットリテラシー

多くの大人は、子どもたちに比べ、ＳＮＳについての知識や理解が十分に追いついていないため、大人が子どもを指導した時には、秘匿すべきタブレット端末のパスワードを他者が知ることができるようになっているなど、既に問題が先に起こっていることが多くある。ＩＣＴは進展のスピードが早いため、大

人自身も学ぶ機会を設けることが大事である。

大人が学ぶ機会として、ＰＴＡが、ネットリテラシーやＬＩＮＥの使い方などをテーマとして、講演会や勉強会を実施している例もあり、有効な取組である。

小学生が一人１台端末を持つようになり、これに加え、スマートフォンを使って人間関係を構築する中で、発達段階に応じた適切なコミュニケーションのとり方の練習などを、学校でも取り組んでいくことが必要である。

ＩＣＴの活用は、これからの教育には欠かせないものであり、使う、使わないの議論ではなく、どう使っていくかを考えていく必要がある。

○　その他

いじめの相談に対応するためには、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置を充実することが重要である。まずは気持ちを受け止めることで、少しでも状況が改善に向かう可能性がある。そのため県教育委員会には、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置の充実を求める。

学校は、ＰＴＡにも協力を求め、連携していくことが必要である。先生と親の互恵的関係の中で、学校教育を作り上げていかなければいけない。学校が本当に困っているということをＰＴＡとの協議の中で伝えながら、子どもを支える枠組みを作っていくことも大切である。

子どもが自分の中に、いじめてしまうかもしれないという気持ちや、自分もいじめられてしまうかもしれないことを理解し、いじめを「自分ごと」として考えられるような場面を設定することが必要である。